

---

# 竜王の系譜（仮）

千野メロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜王の系譜（仮）

### 【Nコード】

N3190BA

### 【作者名】

千野メロン

### 【あらすじ】

竜王。高校一年の鳴神竜彦はその話に飽き飽きして<sup>なるかみたつじこ</sup>いた。そんなある日の帰り道、「竜王に興味ない？」と言うボロ布を纏った人物に出会う。戦きに震えつつ竜彦が興味がないと答えると、たちまち光と共に人影は消えてしまう。奇妙な出来事を気に留めて竜彦が家に帰ると、自分の部屋にボロ布を纏った少女が。霊だと思い込み少女と話すうちに、竜彦はその少女が竜だと知る。竜彦は少女に「戦わなくてもいいから守ってほしい」と言われ……………竜の王様の座を巡る、竜族の少女と人間の少年の物語。

ジャンルはアクションとラブコメです。

更新不定期。二か月に一回だったりすることもあります。

## 出会い？（前書き）

本作品は長編です。一話につき本での10ページ程となっております。最初の方、話がふらつくこともございますが、長い目で見ていただけると嬉しいです。

出会い？

また聞こえた。最近俺の周りや世間は騒がしくなっている。ちょっとした噂話で。

「ねえ竜王って言う人また出たらしいよ」

「マジで？」

「うん。駅の裏側の通りで竜王に参加しないかって聞かれたらしくてさ、嫌だって言ったら何もなかったって」

「じゃ死なずに済んだんだ」

近くの席の女子2人の会話に、ばかばかしいと心の中で笑った。

竜王。最近何かと騒ぎの中心になる言葉で、飽きるほどに聞きなれた言葉だ。

知らない奴が突然声をかけてきて、竜王っていうゲームをやらないかとか、王様になりたくないかと言ってくる。その時点でおかしな話だが、それにイエスとかうんとか答えると、攫われたりして数日後に死ぬ。

そんなしょうもない都市伝説が俺の周りでは流行っていた。現にこの1-2にいる教室でも皆が話しているのだ。

俺は、そんな馬鹿みたいな噂には最初から興味がなかった。

そもそも竜王というゲームをやっている奴を、俺は見たことが無い。いや、ゲームなのかどうかも最近では怪しくなっている。

最初は誰もがテレビゲームだと思っていたはずだ。だけど、誰もそんなゲームをやっていない。発売されたことすら誰も知らない。それが嘘だということに気づいた奴がいたからなのか、今度は誘拐や都市伝説風の噂に変わっていった。

その噂も最初はカワイイ子を攫うだとか、カッコイイ奴を攫うだ

った。俺は男を攫ってどうするんだとか思ったけど。そんな誰かを攫うはずの竜王とかいうゲームは、噂が噂を呼んだのかそういう噂を誰かが作ったのか、今では死人が出るゲームへと変わり果てていた。いや、既に誘拐だ死人だと言っている時点でゲームですらないゲームだったらやってみたいとは思ってたけど、死ぬようなゲームをしたいとは思わなかった。ゲームして死亡。死に方としてはどうにも言えないくらい情けない。本当に死んでも死にきれない死に方だ。

「りゅうくん」

と、いつのまにか考えていた俺にいつもの調子で呼んできた。角田だ。教室の後ろの入り口へと体を向け、軽く握り拳を作る。

明らかに朝から元気そうな奴が走って俺の方へ向かってくる。寝ぐせバツチリ、バッグを手にはぐらりと提げた男。角田光輝（つのだひかり）だ。そいつへと拳を作った右腕を前へと出す。

「それで呼ぶなっっていつてんだろ」

軽く突き出した拳が角田の腹に当たる。拳を解くと、角田はパンチが当たった腹に手を置きながら、いかにもぬけている笑顔で言った。なぜかこいつが笑うと癒されて楽しくなる。不思議な雰囲気を持っている。

「じゃあドラゴンヒコーキ」

「ちがーう」

「それじゃあ、たっちゃんひこまるのすけ」

「誰だよ。つか俺の名前の原型どこいった」

「たっちゃんのたっ、と」

そこで説明を止めさせた。いや止めた。俺の名前は鳴神竜彦だ。なるかみたつひこ  
ひこまるのすけでも、ヒコーキでもない。まして、たっちゃんでも  
りゅうくんでもない。

説明を止められて、いかにもつまらないという顔を向ける角田に  
言葉を返す。

「ヒコーキはお前のほうだろ」

「俺飛べねえよ。翼がねえから」

「あつたら飛ぶのかよ」

角田が俺の肩に手を置いた。途端に視界が揺れる。角田がガクガクと俺を揺らす。

「飛ぶのが人だろ。翼あつたら飛ぶのが人だろ」

わかったと連発する俺からようやく角田は手を放した。人をふるいみたく揺らしといて笑っている。人を揺さぶって面白いかと聞きなくなる。だが、俺だつたら間違いなく面白いと答える。

ふざけて笑っている角田に一つ疑問を感じた。

角田は元々テンションがバカみたいに高い奴だ。しかし、朝からテンションが高いことはあまりない。朝から徐々に上がっていつて昼辺りに爆発する。そのほうが余計迷惑なんだが。朝は普通の角田だ。だからこそ、なぜここまで気分がいいのかわからなかった。

自分のバッグをなぜか俺の机に置く角田に、何かあつたなと踏んで聞いたです。角田の席は一番後ろの俺の席からすぐ目の前だ。そつちに置けと言つと素直に従つた。

「お前なんかあつたのか？」

「おつ聞いたな。聞くんだつたら最後まで聞けよ」

やけにノリ気で押してくる。にやけてる辺りが危ない。そこまで押されると逆に引きたくなる。

引き下がれるなら引き潮みたいに下がりたい。そんな気持ちを察してか、俺の思いを知らず角田はイスにまで手をかけた。逃がさないつもりだ。話し終えるまで。

仕方なく聞く。聞けば終わるのだから。

「アレだよ。竜王」

タブーだ。そう思ったのもすでに遅かった。

調子よく角田が喋りだす。

「竜王っていう奴にあつたんだよ。声かけられてさ、うわっ死ぬのかなとか思ってたんだよマジで。ヤベー死ぬとか誘拐するなら美人がいいとか思ってたんだよ。で、嫌だっけ言ってたんだ。そしたらそこからがスゲーなんだって」

聞きたくないものを聞くのがこんなに辛いとは思わなかった。楽しそうに話す角田に対して、俺はいつそのこと攫われると思った。けれどそれは口にはしない。言っていい事と悪い事がある。例えば本心から言いたくてもだ。

一人盛り上がってスゲーを連発する角田に俺は先を進めさせる。死ぬと思ったところがそんなにスゲーのかと思うほどに言ってるからだ。

「で、先は？」

「顔を覗いたんだよ」



緊迫した状況で顔かとツツコミたくなった。死ぬところはどこでもよかったらしい。

「マジでメツチャカワイイ子だったんだって」

聞き捨てならない事を角田は言った。

「女だったのか？」

「そうなんだよ。しかもメツチャ美人。アイドル並み、いやアイドル以上の女の子でさ、この子にだったら攫われてもいいかなあって思ってたんだよ。けど、その子、わかったごめん、って言つてさあ、去ってっただよ」

喋りとおした角田に適当に返事をした。俺が聞きたかったのは竜王と言ったそいつが美少女だったことじゃない。そいつが女だったことに驚いた。俺はてっきり男だと思つていたからだ。

子供を攫ったり誘拐するのはニュースでみると大抵男だ。だからこそ角田曰くの美少女が誘拐していることに驚いた。

だが、それで攫われているのなら納得もいった。美少女が誘つてきたならその話に普通乗る。俺も断るが惜しいとは思っただ。

「惜しいよなお前。攫われて殺されなくてよ」

「だよなあ。いや死にたくはないんだけどよ」

「いつそ死んで生まれ変われよ。真面目で誠実なやつに」

「誠実じゃ俺。ちゃんと思つた事言つたろ」

それは単に馬鹿で素直だけだというのは止めた。

「それ誠実じゃねえから。ただ素直なだけだつて」

「おっ、純粹つてこと」

下心が見えていて純粹。それはかなり恐ろしい事だと思った。そいつが普通なら世の中どうなるんだか分からない。常識を覆すところでは認めるが、一緒に全世界が崩れるような気がした。秩序もへったくれもない世界。角田の下心で世界が恐怖に陥る。かなり危険な世の中だ。

それから角田と美少女らしい竜王の話をして、ホームルーム、授業を終えた。

そうして下校の時間を迎えたが、俺には納得がいかない物があつた。竜王と声をかけるのが少女だったことだ。別に美少女には興味が無い。竜王に関しては。

部活をしていない角田や他の友達と遊び、少しばかり暗くなった帰り道を一人で歩きながら考える。四月も終わる。もうすぐゴールデンウィーク。そんな楽しみが胸の中で踊る中どうしてもあることに心が向く。竜王と声をかける不審者についてだ。

なぜ少女が人を攫うのか。攫ったところで何の得になるのだろうか。人を攫って売る。人身売買だとしても、男を攫って金になるのだろうか。仮にそれが金になったとして、そこまで金に困ってる、としたらかなりおかしい。そのうえで噂では死人がでる。人殺しをしたら金にも何にもならない。矛盾だ。

そもそも角田が言っているだけで少女だとは決まってる。角田が見たのが少女だっただけで、オッサンかもしれないしオバサンかもしれないなかった。ありえないだろうけど、中学生や小学生だってありえた。竜王と言えば皆が騒ぐのだから。

そんな風に疑問を持って悩んでるうち、自分が竜王を信じてるようになっていたことに気がついた。決して竜王という可笑しなゲーム、都市伝説を信じているわけじゃない。変な話を聞いたから考え

たてただけだ。

竜王はただの噂話。ローブを纏った人間だとか、殺人鬼のような目だとか、銃や包丁を隠し持っているだとか、美少女だとかは面白くない誰かが言った事。ただの妄想で夢の話でしかないのだ。

バカみたいな噂話を頭からとっばらった俺を次の瞬間衝撃が貫いた。

「ねえ竜王って興味ある？」

竜王に興味ある。今払った噂話と角田の話が頭を過る。  
嫌な予感に振り向いた。

「わっ、なんだお前」

本当に目の前だった。向いたすぐ後ろにボロボ布を纏った人間が立っていた。背後霊のような姿に俺は思わず仰け反った。薄暗い街路でそんな人間がいたら誰だって仰け反るし逃げたくなる。

背後に立っていた人間を俺は怪訝な目で見まわした。

そいつは頭から布のようなものをかぶり顔はよく見えない。背は俺よりも低く胸ぐらいまでしかない。160がいいところだろう。もう少し低いかもしれない。

そして、纏っている布は擦り切れていて、ゴミの中に埋もれていたかのような汚れまでついている。漁ってきたのかと疑いたくなるほどのボロボ布だ。

ボロボロの布をフード見たく被った、どこから見ても怪しい人間。

俺は咄嗟にポケットの中に手をつっ込んだ。誰かしらに電話だと思ったのだ。

ケータイを取る俺に怪しい人物が声をかけてきた。

「ねえ竜王って興味ある？」

良く聞けば艶やかな女の声。やっぱり角田の言ったとおり女だと確信した。

「ねえよ。つかお前誰だ」

答える俺に女らしき人物が声を上げた。嬉しそうな口調で。

「ないの。王様になれるんだよ」

「その王様ってのにも竜王ってのにも興味ねえよ」

「ホントに？」

喜んでから疑うような聞き方に恐怖が増した。しつように竜王になりたくないのかを聞いてくる。まるで脅迫されてる気分だ。改めて誰もが頷いたり、怖がるのが分かる気がした。これに答える言葉の一つで生き死にが分かれるなら、答えない方がマシだと考える。けれど、これでもう一度聞かれたら、思わず答える。間が空くことが怖いのだ。

動きの止まった俺に謎めいた人物が首を傾げた。

「ねえ、ホントに竜王になりたくないの？ 王様を目指したくないの？」

口が動く。答える気はないが、答えない方が余計恐ろしい。

「あ、ああ。俺は王様とかには興味がない」

しつかりとゆつくりと答えた。まるで言わされてるみたいだ。いや、自分で答えようと思っっているのは確かなのだが、そう言わされてるような聞き方だった。

俺が答えた直後目の前の人物が動いた。布の中でごそごそと何かが動く。恐らく手だ。手で何かを持っているのかもしれない。

嫌な考えが浮かんだ瞬間、ケータイを持つ指が動いた。家への電話だ。今の時間なら瑠美るみがおふくろがいた。電話を繋つごうとボタンを押したその瞬間、

「誓って」

そう言われてボタンを押す指が止まった。

はっとした顔で前を見る。ボ口布の隙間から青白い光がキラリと光った。危ない予感。

逃げ出したいが足が動かない。

「誓え。『我竜王の采配より見いだされしもの。健全なる心を持ちてあらゆる者に挑み、誰も殺めることなくそれを慈しむ。裏切りは許すことなく死を持ってそれを返し、恨むことなく死へと旅立つこと。我が身を汝に託し、託されし汝は戦場に我が身を投じ、竜王の名を継ぐ者として約束を果たす』と」

硬直する。何も言えず、分からずただ立ち尽くす。ケータイが手から落ちるのでさえ分からなかった。

気付くと目の前のボ口布を纏った人物は消えていた。

俺の記憶にあったのはボ口布を纏った人物が突如物凄い勢いで喋ったことだけだった。何を言っていたかは前半の部分すら覚えてない。いや、ほとんど聞いていなかった。長く早口に喋ったことに驚きすぎて何も聞こえてなかった。

覚えてるのは暫えといきなり叫んで、棒読みの文章のごとく何か言ったただけだった。光ったなにかも全く分からない。ただ何か難しいことを謎の人物が言っただけしか頭になかった。

突如受けたあまりの衝撃にしばらくその場を動けず、ようやく動いた時には10分が過ぎていたことを、拾ったケータイで知った。ケータイは誰のおかげか分からないけど無事だった。あと、自分自身も。

その後もぼんやりとしたまま家に着いた。どう帰ったかは覚えていないけど、恐らくいつも通り帰ったはずだった。

俺の家はどこにでもありそうな普通の一軒家だ。二階建てで門がついている。庭は小さな縁側がある程度。至って普通の家だ。

黒い色に曇りガラスの付けられたドアを開けて中に入る。玄関でただいまと一言言うのが日課であり決まりだ。

お帰りと合わさった声が居間から返ってきた。妹の瑠美るみとおふくるだ。二人で何か作っているに違いなかった。いつもそうだからだ。

靴を脱いで土間から上がる。玄関の右前には二階への階段。二階にはそれぞれの部屋がある。俺と瑠美とおふくるとばあちゃんじいちゃんのだ。うちは五大家族で、親父はいない。

玄関から廊下を少し進んで左が居間。自分の部屋に行った後で入ろうと思った直後、居間のドアが開いた。

「お兄ちゃんお帰りー」

陽気な声で迎えられる。妹の瑠美るみだ。にこにこ笑っている。中学生になってから、そのぼやとした笑い方がどこか角田に似ている。間違っても角田の妹じゃない。俺の周りには、そういうのほほんとした笑い方をする奴が多いらしいのだ。なぜか。

二階に上がるうとして、瑠美るみに止められる。

「門限は守らないと」

「ないだろ、門限なんて。いつ決まったんだ」

「今決まって、今が門限」

「六時は早いだろ」

「じゃないと、お兄ちゃんが人攫っちゃうから」

「しねえって。誰がするかそんなこと」

言い返して、さっきの事を思い出した。

突如現れたボロ布の霊。現れて消え、光ったあたりを見ると完全に霊だ。

恐らく、捨てられたボロ布に愛着がわいて乗り移ったのかもしれない。恐ろしい話だ。ボロ布に愛着がわくなんて。

嫌な物を見たと頭の中から追い出す。瑠美るみがはにかんだ。

「早く降りてきてね。餃子だよ餃子」

「よっしゃ」

どこか嬉しくなって階段を上る。餃子は俺の好物の一つだ。

階段を上って自分の部屋のドアを開けた。いつもの部屋が出迎える。

フロアリングの部屋。ドアの真ん前には勉強机。左手にはベッドと窓。本棚があつて有名なミュージシャンのライブのポスター。そして一応綺麗に片付いている部屋。殺風景と言われればそれまでだが、言われたことがないので寂しい部屋でないらしい。

餃子の事を考えながらドアを閉めてバッグを投げ出す。脱ぎ捨てた部屋着を手についた。早く着替えて飯を食いたい。変な事が起きて余計に腹が減っていた。

着替えるためにシャツを脱ごうとして、

「ねえホントに竜王になりたくない？」

その声にバツと振り向いた。

白いカバーのベッド。俺のベッドの上にボロ布の霊が座っていた。

思わず仰け反り後ろの壁にぶつかる。何も置いていないから痛みは壁だけで済んだ。だが、不意打ちの激突は痛い。

痛む頭を押さえて目を開けると、目の前に霊が移動していた。俺を見上げる形なのに顔が見えないのがさらなる恐怖をそそる。

「わっ！　つかお前なんだ。さっきの言葉呪いか何かか」

「呪い？」

聞いてきた。さっきから聞いてばかりの霊だ。

想像以上にボロ布が目の前にいると怖い事に気が付く。

「さっき何か言ってたろ。わけわかんない言葉」

「誓いのこと」

「しらねえけどそれだ」

「呪いじゃない」

「じゃ、なんでお前ココにいるんだよ。着いてきたんだろ成仏できずに」

「じょう、ぶっ？」

霊が首をかしげる。死んだことにすら気づいていない。死んだことを自覚してない。だとしたら、質が悪い。理解させるまでこいつと話すことになる……と、そこでさらなる衝撃があった事に気が付



いた。

「俺お前と喋ってる」

思いがけない衝撃に声が出た。

霊との会話。もちろん俺にそんな能力はない。だから一瞬、自分が死んだのかと疑った。だが、そんな覚えもない。それに間違いなくさつき瑠美とも会話した。生きてる証言者はいる。

だが、こいつは間違いなく死んでいる。じゃなきゃ、俺の部屋にいるはずがない。二階の窓以外入れる場所などないのだから。入っていたらきつと誰か気が付く。

死んだことを理解してない霊と喋れる。その衝撃に体が震えた。しかし、説得しない限りどうにもならない状況。怒らせないように、さらなる呪いをかけられないように霊との会話を試みる。

「死ねなかったんだろ」

「私まだ死んでない」

「じゃなんでお前ココにいるんだよ。しかも、なんで布纏ってんだよ」

「これは、隠すため」

「死んだことをか」

「違う！」

話すうちにもっと分からなくなる。普通死んだら白い着物を着ていると聞く。それがなぜ身を隠すためにボロ布になるのか。

棄てられたからか。だとしてもボロ布じゃなくていいはずだ。もっと別の服があったはずだ。ボロ布じゃなく白い布でもいいわけだ。着た所で怖いことに変わりはないが。

恐怖に襲われているのに、話が分からないのが混じって顔が険しくなる。そんな俺を見かねたのか霊が顔を突き出した。その姿でな

ぜ寄るのかわからない。

「もういい。ねえ竜王とか王にはなりたくないんでしょ？」

「あ、ああ。それより顔を、」

頷いて霊に顔を離すように言いかけて気づいた。ボロ布の中で青白い瞳が動くのが見えたのだ。死んだら瞳まで蒼くなるらしい。

怒りかけている霊が顔を引かずに言う。

「なりたくないなら、誓って」

「何をだよ」

「誓って。『我竜王の采配より見いだされしもの。健全なる心を持ちてあらゆる者に挑み、誰も殺めることなくそれを慈しむ。裏切りは許すことなく死を持ってそれを返し、恨むことなく死へと旅立つことを。我が身を汝に託し、託されし汝は戦場に我が身を投じ、竜王の名を継ぐ者として約束を果たす』と」

なれた口調で少女が言う。やっぱり俺には謎めいた呪いの言葉にしか聞こえない。

「誓えばお前は消えるのか」

「私は消える」

そう言った霊に俺は頷いた。消えるのなら誓ってもいいと。呪い改め成仏のための念を唱える。

「我竜王の、なんだっけ」

「言えなくてもいいから続けて」

覚えられない俺に霊が怒ったように言った。なんで俺が怒られる

のかわからない。成仏して消えてほしいだけなのに。  
霊の後を追うように言う。

「『我竜王の采配より見いだされしもの。健全なる心を持ちてあらゆる者に挑み、誰も殺めることなくそれを慈しむ。裏切りは許すことなく死を持ってそれを返し、恨むことなく死へと旅立つことを。我が身を汝に託し、託されし汝は戦場に我が身を投じ、竜王の名を継ぐ者として約束を果たす』」  
「うおっ」

青白い閃光。きつと浄化か何かだ。その途端何かに包まれるような感覚が襲った。消えた。霊の浄化に成功。

眩しさが消えるのを感じて目を開けた。

目の前には窓。下には白いベッド。左右には見慣れた本棚やポスター。確実に俺の部屋だ。

何が起こったのか分からないが安心する。場所が移動したのは恐らく霊の最後の悪あがきだ。悪霊だったのかもしれないが、消えたのならそれでいいと俺はほっと胸をなでおろした。

「何の溜息だ」  
「！」

悪寒が走る。恐る恐る錆びれたロボットか人形のように首を後ろに向けた。そして目に飛び込んできたものに叫ぶような声を上げた。

「なんだお前。つか誰だ。霊の置き土産か何かか」

ボロボロのようなワンピース調の服を身に着けた小さい女の子が、俺の勉強机のイスにちょこんと座っていた。

「静かにしろ小僧。三度お前は騒ぐのだな」

小さな女の子の口から放たれた口調と声に驚いた。年寄りのような口調。しかし、声は女性だ。見た目に見合う女の子らしい声ではない。

怯える俺に少女が聞く。

「名はなんという？」

聞き間違えかと思うほどに少女の声は不釣り合いだった。

見た目はかわいらしい女の子そのもので、青く澄んだ瞳と青白い髪が目立っている。

一瞬見ただけでは気づかなかったが、イスに座つているというよりも立っている。それを見ると、歳は9歳がいいところだ。瑠美を思い出せば身長や見た目から見てそうなる。そんな子が年寄りの言葉を使っているのだ。違和感を覚えない方が可笑しい。

さっきの霊が転換してこうなった。だとしたら成仏してないことになる。しかも、さっきより質が悪そうな気がした。やたらと口が悪い。

ジロジロと見る俺を見て、女の子の顔が険しくなる。歳に似合わないややはり怖い。

「名はなんというか聞いておるのだ。名乗れ」

「な、なるかみたつひこ鳴神竜彦」

「竜彦か……………」

いきなり呼び捨ての少女を俺は怪訝な目で見続ける。手を顎につ

けて何か考えているらしい。よっぽど大事な事なのか、それとも名前を聞いたあたりニクネームか何かか。霊みたいな少女にいきなりそんなものつけられるのかもしれない。だとしたら嫌だ。まるで本当に憑りつかれたみたいじゃないか。

そんな風に沈黙が破れるのを待つ俺に少女が顔を向けた。

「凡庸すぎる」

「はっ!？」

衝撃だった。なんだ凡庸って。

「前は楠瀬<sup>くすせ</sup>だった。今度は竜彦か……頼りないがまあ仕方ない」

凡庸と言われ悪いかと言いかける。世渡りする霊だということがわかった。楠瀬という奴は知らないが、俺で二人目らしい。前の奴はどうしたのか聞くのが恐ろしくて止めた。死んでたら、俺が死ぬことになる。それを聞くほどの勇氣はない。

仕方ないと言われて腹を立てる俺の氣を知らず、霊は目を見つめ返してきた。

「竜彦、お前に頼むことは一つだ。我を守れ」

「はっ!？」

俺は大声を出して固まった。

出会い？

俺に構わず少女は続ける。

「我はお前に戦えとは言わぬ。守って死ねとも言わぬ。我のために死んでくれとも、戦えとも言わぬ。ただ、我を守れ。我を守れば逃げようが汚い手をつかおうが構わぬ。何があってもまず我を守れ。よいな」

一頻り喋ったらしい少女に、よくねえよとツッコミかけた。

霊が守ってくれと頼むことなんて普通しない。いや、聞いたことがなかった。守護霊的な物が守ってくれるとは聞いたことがあるが、霊が守ってくれとは聞いたことがない。しかも戦うとか、逃げるとか、死ぬとか、死んでいるのに殺されかけている霊って一体何だと思った。

驚きで動けない俺に少女の霊が言う。

「返答は無用か？」

「待てよ」

「なんだ、問題があったか」

「守れ、ってなんだ。なんでお前が俺を守らなきゃいけないんだよ」  
「竜王のせいだ」

出た。竜王。なんでそいつが絡んでくるのかわからない。竜王っていうくらいだから、きつと王様だ。霊の王に何かしたわけだ、この霊は。霊の事は霊同士で解決しろと思う。生きてるやつに振りかけることじゃないだろ、普通。

不満と疑問を同時に少女へぶつける。

「竜王って何なんだよ」

「竜の王、そのままの意味だ」

「は？」

聞き返す俺に少女が首を傾げる。二人で傾げているから、話が噛みあってないの是一目瞭然だ。

「竜を知らぬか？」

「いや、知ってるがアレは架空の」

「架空ではない。現に目の前におるう」

「どこにだよ」

「我がそつだ。文句があるか？」

固まる。俺も霊も場も。

俺は信じられなかった。いや、信じられるはずがなかった。信じなくてと言われても信じられない。だからこそこう考えた。

少女の霊は死んだときに頭を打った。そのせいか、人格から全てがおかしくなった。自分が少女だということも、人間だということも、全て忘れてしまったのだ。その方が自然だ。竜がいるっていうのも子供の時の記憶があるから言っているだけであって、夢のような話を現実に行っているだけだ。

自分を頷かせ、イスの下を見た。途端に頭がパニックになる。顔の筋肉ヒクヒクと動く。

少女が立っているイス。俺の机のイスから足のように太いものがプラプラと揺れているのが見えた。もちろんそんなもの部屋に入った時はなかった。それが右に左と漂うようにゆっくりと揺れている。

まるで尻尾のように。

気になるそれに指をさして少女に聞く。何かの間違いだと祈りながら。

「それ、なんだ？」

指差した方を少女は向きすぐに顔を戻した。

「私の尻尾だ。触らせはせぬぞ」

真顔で答える少女に首を横に振った。いよいよ目の前にいるのが人じゃないことを知る。目の前にいるのは少女の霊じゃない。怪物か妖怪の一種だ。

人間から尻尾が生えているなんて聞いたことがない。猿にしたって目の前の少女が猿とは思えないし、似ていない。ましてや猿の霊でもなさそうだ。間違いなく人間だ。けれど、矛盾にも尻尾が生えている。

次々飛び込む理解できない状況に頭がパニックで破裂しそうになる。なぜか知らないけど叫んで走り出したい気分だ。走ってどこに行きたいわけでもないが。

動揺する俺に少女が更に衝撃を与えてきた。

「翼も生えておる」

「いいから、見せなくていいから」

拒否する俺に断りもなく少女が後ろを向いた。尻尾もグルリと回る。それが一番可笑しい、と思った俺が間違いだった。



「あ、ああ……」

少女が後ろを向くと、ワンピースを突き破って鱗のついた二つの翼が背中に見えた。しかも、腕で隠れるほどに小さな青白い翼だ。そして、お尻の部分からは鱗に棘のようなものがついた、少女の身の丈ほどもある尻尾が覗いていた。ワンピースの裾が尻尾に乗っている。完全に異形の生物がそこにいた。

再び少女がクルリと回る。どうだと自慢でもするかのように胸を張っている。

「お前、いったい」

「竜と言ったでおろう。ふむ、それよりもどこまで話したか。竜彦は覚えておるか？」

首を横に振る。少女の見せたその全てに対して。

「そうか。忘れるとは問題だな。なら竜王についてだ」

首を振り続ける。竜王など、もうどうでもよかった。人間じゃないのが目の前にいる。そっちのほうが竜王よりも遥かに問題だった。首を横に振り続ける俺に、少女はあどけない表情を顔から消した。

「しっかりしてもらわねば困る。些細なことであろう、尻尾と翼など」

少女がため息交じりに言った。少女にとっては些細な物らしい。尻尾と翼が。尻尾と翼が。尻尾と翼が……。

何も喋ることのできない俺の事を無視して、少女は語り始めた。そういう性格なんだろう、きっと。

「10年に一度我々竜族の王が交代の儀を行う。理由は言えぬが、そういうしきたりなのだ。王になる資格を持つものは竜族全員、裏切り者以外だ。竜王になれば10年間は絶対の王の座が約束される。そうなければ当然、誰もが竜王の座を狙いたがる」

とりあえず、少女の話を信じられない。しかし、聞くだけ聞く。万が一、いや、億が一にも少女が竜なら人類史に関わる。

「それとお前と俺に何の関係が、っていうよりもお前は本当に竜なのか？」

「お前は人の話を邪魔するタイプか？ 黙って聞け」

出かけた拳をそつと引つ込める。少女であろうと思わず殴りたくなつた。

口調がまず殴りたい奴だ。妄想に付き合っておりながらも関わらず、黙って聞けはない。こっちは死ぬほど驚いているのだ。

「だが、竜王になるには条件がある」

「条件？」

「聞け、話を」

言われて黙る。子供のように。

少女には合いの手が禁じ手らしい。つまりは、少女が喋るだけの独擅場だ。どくせんじょう

「条件は至って簡単、竜王になりたい竜族を全員統べることだ」

聞きかけて口を閉じた。開けば無視が待っているからだ。

「続べると言っても、倒すに近いが殺しはせぬ。殺したら仲間が減るからな。普通は生かしておく。そうして、全ての竜を統べて竜王と対峙し、竜王を打ち負かせばよい。と、それだけだった」

「過去形だな」

「うむ。そこが問題になる。それでは当然弱い者が負けるのが常だ。わかるであろう?」

頷く。言葉は発さずに。

そして分かったことがあった。先を促すのと重要な事は聞いていらしい。止めるのがいけないようだ。

「そうなれば、公平ではないと下竜かりゅうが言ったのだ」

「下竜?」

「下位の竜だ。人から見れば畏怖の対象でもあろうが、竜族にとつては何、ただの弱卒だ」

「ああ、つまりその下竜かりゅうつてのが」

「竜王になりたいと言ったのが、我がお前の前にいる理由だ」

今度は完全に俺の言葉を遮った。話を聞かせる気があるののか分らない。

「人と組めば勝てるだけでも考えたのであろう。だが、それならば上竜りゅうが組んだら同じに決まっておろう。強い者が組めば同じだ。だがそこは当然馬鹿ではない。上竜りゅうが組めば同じだと言ってそれを許さず、結果下竜かりゅうと中竜ちゅうりゅうのみが組めることになった」

上竜りゅうについては聞かない。下竜かりゅうが一番下なら、上竜りゅうは上だ。ツツコンでも無視されるのが落ちだ。試してはみるが、

「なあ上竜りゅうつて」

「話をしているのだ。茶々を入れるでない阿呆」

最低の言葉で返された。別に冷かしじゃない。率直な疑問だ。なのに茶々を入れるなって、俺が無視したらどうなるんだこいつは。

「それゆえ、我がお前の前にいる」

「つまりお前は弱いんだな」

俺が言った途端に少女は一変する。

「慎め！」

叱咤の声で少女が回った。何かと思った途端、空を一文字に裂いて尻尾のしなる音が聞こえた。

「ぶっ」

顔を人間の力じゃない何かが激しく打ち、俺は本棚まで素っ飛ばされた。気を失いそうな痛みが走りぬける。それと共に頭から漫画などの本がバサバサと落ちてきた。挟み撃ちだ。

痛みを声に出して前を見ると、少女が腰に手を当てイスの上で仁王立ちしていた。ちょこんと立って。

「これほどで飛ぶお前が我に弱いと言える立場か？」

「何しやがるんだ」

「口数の減らぬ小僧を叱っただけだ。何か文句があるなら言うてみよ」

少女の言葉と共に太く長い尻尾が床をバシリと叩いた。軽く振っただけなのに尻尾で叩いた部分が割れるように見えた。いや、実際

ヒビが入っていた。

少女の後ろに艶めかしく動くアレで叩かれたのは間違いない。鋼鉄の鞭だ。心なしか骨にひびが入ってるような気がした。

「言っておくが、さっきのような言葉は慎め。我に弱いなど誰もいえるはずなからう」

「でも、現にお前の話からは」

「我は上竜じょうりゅうの上、神の位いに立つ者だ。弱いはずなからう」

自分を神様呼ばわりだ。もうどうかしてる。

「神って……お前馬鹿か」

「本当だ」

「証拠は」

「証拠はないが、言っておるだろう」

「口だけじゃなあ」

少女が口先を尖らせて唸るように俯いた。

勝った。初めて口で勝った。上から目線の少女を負かした喜びで思わず頬が緩む。

「本当だ……」

喜ぶ俺の前で少女の声が震えた。涙声のような弱弱い声。さつきとは大違いだ。

優越感に浸っている場合じゃない。泣かしたのかと思って心配になる。

そんな俺の思いとは裏腹に少女は頷いた。

「よからう。弱いというのならそれでよい。我が調子に乗ったのも

悪いのであろう」

意外だった。少女の方が大人だ。口で勝って喜んだ俺よりも遥かに大人だ。喜んだ自分が恥ずかしくなる。

「すまぬな」

戸惑う俺に少女が先に謝った。

「いや、別に、俺も悪かった」

「うむ。しよっぱなからこれではうまくいかぬ。今は水に流せ」

恐れ入りますと言わんばかりになぜか俺は頷いた。本当に少女とは思えない態度だ。口も見た目も中身も全て。

少女がふむと声を出して俺を見つめる。青白い瞳がじっとこつちを見た。

「竜彦と申したな。今の話をまとめて率直に言う。我は竜王になりたくない」

「は？」

俺は驚いた。少女は王の位にはなりたくないというのだ。話をまとめて俺が信じた場合だが。

「無理やり参加させられるこの竜王決めだからこそ、我はいるだけであつて、なる気は微塵もない。だから、お前は我を守れ」

「はあ？」

意味不明だ。なりたくないのなら俺が守る理由がない。戦うだとか、なんだとかそういう話なのだから。が、あくまで俺がその話を信じた場合だ。

少女が腰に片手を当てたまま言う。見た目はやっぱり小さい女の

子だ。

「我は他の者に負ける気はない。かといって死ぬ気もない。だが、勝つ気もない。だからこそ、我に近寄る竜から我を戦わせぬように守れ。そのためなら逃げて構わぬ。よいな」

理解できず固まる。負ける気はないが、勝つ気もない。かといって死ぬ気もない。伝統の儀式らしい話なのに、それに参加する気もなく、襲ってきたら助けてくれと言っている。

単なる少女のわがままだ。それになぜ俺が巻き込まれるのか分からない。

少女に大人気もなく反発する。

「なんで俺がお前と組むんだよ」

「お前は言ったであろう。竜王にも王にも興味がないと」

そこで少女の意図に気付く。

「王になりたいという者であれば我は組む気がなかった。我が望むのは守りだ。死ににいくような者を求めてはおらぬ。そもそも戦いの実力があればいいが、所詮人と竜だ。敵わぬであろう。なれば、実力があっても同じ。かといって、あまりに弱すぎれば守りにもならぬ」

そこまで話せばわかる少女の求めているものが。それに気付いて目元が痙攣する。

「つまりお前は俺に盾をしろと？」

「理解が速いな。そうだ、我の盾になれ。だが、死ぬとは言わぬ。竜王が終わるまで生きてもらわねば困るからな」

「でも、最後はお前の所に来るぞ」

「来ない」

「なんでだよ」

可笑しな事をいう少女は、しめたともいうような怪しい笑みを浮かべた。

「お前は本当に全ての竜と戦えると思うか？」

そこで俺は納得した。確かに、全ての竜と戦った、という証はどこにもない。少女の話だと、証を持って来いというわけではない。だったら、大まかな相手と戦い竜王とやらの所に行ってもなれるわけだ。

それに気付いて俺は答える。

「無理だ」

「で、あろう。だからこそ我は終わるまで待つのだ。ひっそりとな」

「その隠れ蓑が俺か？」

「うむ」

その頷く速さに腹が立つ。

「出てけ」

「無理だ」

「なんで!？」

「交わしたであろう誓いを」

やたら長いさっきの呪文を思い出す。アレだ。誓いと確かに言っていた。呪いではなく。



「お前が死ぬか、竜王が終わるまでの間。我を守るとの誓約だ。破棄したければ死ぬことを勧めよう」

ここまで来たら呪いと一緒だと思った。死んで破棄なんて絶対なしだ。と、泣き言を言おうとした俺に考えが浮かんた。

「お前を竜王にすれば解けるじゃんか」

名案だ。こいつを竜王とやらにすれば誓いではない、呪いが解ける。

少女は鼻で笑った。俺の案を。

「言っただであらう。我は竜王になる気がないと。それにお前が竜に勝てるとは思えない。もし戦うなら行ってもよいが、その時は、我はお前を見捨てるぞ」

一瞬こいつには心がないのかと疑った。自分から組む相手を見つけて決めといて、いざとなったら捨てる。外道もいい所だ。いや、外道の方がまだ優しいかもしれない。氷よりも遥かに冷たい少女だ。可愛らしさの欠片もない。

冷徹な少女が微笑んだ。

「生きたければ戦うな。簡単であらう。お前が自分で向かわない限り、死なせはせぬ」

やけに説得力のある言葉。一瞬、頷きそうになった。

しかし、これをまともに受けて良いのか悩む。いざとなったら、捨てられるわけだ。盾として。

俺は少女に確認するように聞いた。

「戦わなければいいのか？」

「そうだ。戦うな」

「わかった」

俺が頷くと少女も頷いた。

元々竜王に俺は興味がなからあまり乗り気でもない。竜だとか王だとかもどうでもいい。戦争みたいなことしたいなら、それでどうぞだ。関わる気は全くないが、少女に絡まれた時点で仲間入りを果たしている。だとしたら、俺にできることは一つだ。

目の前にいる、異形の間人ではない自称竜だという少女の言っており、戦わないこと。それだけが俺にできることだと思った。自分を納得させた俺に少女は突然思い出したように言った。

「そういえば我が名乗っていなかったな」

「ああ、そういえばそうだな」

「我の名は罪羅<sup>ひめ</sup>だ」

「姫？」

聞き間違いだ。こいつがお姫様なわけがない。これが姫だったら相当野蛮な一族だ。竜って言うのは。

少女が首を傾げる。顔が大人じみてなければ子供だ。

「発音が違うな。罪羅<sup>ひめ</sup>だ」

声も言葉も。

「罪羅<sup>ひめ</sup>」

「うむ」

「似つかわしくないな」

少女の眉根が上がった。

「なんと？」

「いや、お前がお姫様じゃないかと、」

ふんと鼻を鳴らして少女がイスから舞い上がった。その姿まさに獲物に食らいつく竜そのものに見えた。

「ぐっ」

そして体をねじり、再び尻尾で叩かれる。いや、打ちのめされる。ちよこんと床に足を付けた少女が俺を睨んだ。

「口が悪くいけすかないが、我の守りを頼むぞ。竜彦」

そっくりそのまま言葉を返したくなった。口が悪いのはお前のほうだと。が、激痛も交じって俺は口走っていた。口が悪いを通り越した言葉を。

「こつちこそ、よろしくな。なりそこないの姫様」

そこに再び鉄のような鞭が俺を襲った。肉厚の壁と半壊した本棚に挟まれる。

死ぬ。他の竜とやらに会う前にこいつに殺される。

俺をなぶった後、少女は思い出しかのように腹を押さえた。

「そうだ、竜彦。我は腹が減った。食い物はどこにある？」

「何食うんだお前は」

「肉がいい」

ぞつとする。飯にもこいつは自称竜だ。肉食だとしたら目の前の俺が肉なわけだ。

慌てて返事をする。

「俺は食えないぞ」

「お前を食うなどせぬ。食っても腹の足しにもならぬであろうが」

その言葉、安心できない言い方だった。腹の足しにはならないが、食えると言った。恐ろしい少女だ。人の姿をした悪魔とはまさにこいつのことだ。きつと悪魔でさえ食うはずだ。腹の足しに。

「餃子がある。それで我慢してくれ」

「餃子？　なんだそれは」

餃子を知らない。やっぱり人じゃないのか。それとも、無知なのか。悩んで答える。

「下にあるから今持って来てやるよ」

「ほう、下にあるのか。よし、行くぞ。竜彦」

待ったを掛けようとしてドアが開いた。瑠美が入ってきた。ノックもせずに。

「お兄ちゃん、うるさいよ。何やってんの？」

最悪だ。変な化け物少女がいるのに、何も知らない瑠美が入ってきた。

尻尾の生えた少女と騒ぎ屋瑠美。絶対に大騒ぎになると確信した。瑠美が少女の尻尾を踏んづけているのだ。少女が鋭い眼を瑠美に浴びせている。

「一人で何してんの。しかも、本ばらまいて、本棚まで壊して」  
「え、一人？」

思わず聞き返す。瑠美は少女の事が見えてない。だとしたら瑠美の方からは騒ぎにはならない。今にも尻尾を瑠美に叩き付けそうな少女が何もしない限りは。

瑠美が腰に手を当てる。横に異形の生物がいるとも知らず。

「一人でしょ？ それともいやらしい想像してリアルか夢かわかんなくなつたの」

瑠美の言葉で少女がこつちを見た。標的が俺に変わったらしい。殺気が構わず飛んでくるのが分かる。

少女の相手をする前に瑠美の誤解を解く。

「そんな想像してねえよ」

「じゃ、なんで本ばらまいてるの」

「これはただ落ちたんだよ。ぶつかって」

「なんでぶつかんの」

「な、なんだっていいだろ。今から下行くから出てけよ」

「別にお兄ちゃんも男だし何しようが勝手だけど、バタバタ暴れるのはやめなよ。うるさいから」

瑠美が腹を立てて出て行った。笑えもしない状況を作つて。

俺は少女の方へ目を合わせる。少女は良く言えばすまし顔、悪く言えば怒りのあまり表情が消えている。逆鱗に触れる気持ちで、恐る恐る、本当に恐る恐る話しかける。

「お前他の奴には見えないんだな」

声が上ずった。少女がドアの方を見た。俺の方を向かないのが余計怖い。

「であろうな。見えたら、我はここにおらぬ」

声のトーンが低い。完全に怒っている気配だ。

「尻尾踏んだのは俺から謝るから」

「よい。見えぬあやつのは事故であろう。仕方ないことだ」

心が広くて助かった。瑠美じゃなく俺が。ただ、顔を向けてほしかった。怒っていないのなら、なぜ翼と尻尾が見える背中で俺と語るのか。その理由を知りたいと思ったが、手を出したら明日が俺の中から消える気がした。

話を逸らすついでに自分を見た。まだ着替えてない。

「でだ、今から着替えるから一旦外に」

「着替えながら話を聞け」

「は？」

着替えながら話を聞く。なぜだと顔に出して言った。

「何か問題があるか」

「いや、俺ここで着替えるんだぞ？」

「だからなんだ。着替えるのはお前達人間の摂理であろう？」

ポカンと口を開けた。摂理かどうかは知らないけど、習性みたいなものではある。少女の言うそれがあっているのは間違いない。ただ、少女がここに居座ることは不自然だが。

間違いないかもう一度訊ねる。

「じゃ、じゃあ着替えるからな」

「可笑しなやつよな。着替え一つで何を騒ぐ」

騒ぐだろうと思った。変態じゃあるまいし、少女の前でいきなり着替える奴が逆にどこにいるんだ。家族でもないのに、いきなり他人が着替えたなら普通騒ぐ。

とりあえず、承諾は得たため着替える。なぜか、俺が少女に背中を向けて。立場が絶対に違うような気がした。

「あのな、途中で騒いでも俺は悪くないからな」

「我は普段お前以外には見えぬ。お前の近親者だろうとなんだらうとだ」

少女にとって着替えとかはどうでもいいらしい。心配する俺の方が恥ずかしくなってくる。

「無論我が姿を現せばお前のように騒ぐであろう？ 故の配慮だ」

あっぱれだと少女に言いたくなった。自分がどんな存在かを理解してらっしゃる。だが、それを言ったら、また尻尾で殴られるのが落ちだから言わない。

「だから、お前が心配するようなことはまずない」

「わかった。でも姿を見せるとかはできるってことだよな」

「うむ。その時は我の姿が変わる」

少女には変身ができるらしい。たぶん、竜だと言っている時点で本物の竜になるに違いない。四つん這いで大きな竜か、蛇みたいに

空中に浮いてる奴のどっちかだ。どっちにしても俺はそれを見たい  
と思わない。

変な話、その竜の飼い主は俺になるわけだ。暴れまわる竜を落ち  
着かせることもできず、肉で大人しくなりますなんて言ったら世界  
は終わりだろうなと思った。

世界の終わりが頭に浮かぶ俺に、その根源が話しかける。

「まあそれも必要なかろう。人になったところで、特などないしな」  
人。少女はそう言った。おかしい話だ。異形の人間なら俺の後ろ  
にいるのに。

「人って、竜になるんじゃないのか？」

「他は竜であろうな。だが、我は人と竜と竜と人の中間、三つにな  
れる」

それを聞いて着替える動きが止まった。やっぱり竜でもない。人  
でもない。霊でもないが、妖怪だ。少女は姿を変えられる妖怪だ。  
かなり厄介なものに憑りつかれた。説明する所に人にもなりますと  
付け加えることになる。探すとしたらこれほど厄介なものはいない。

「だが、人間の世界では人にはなれるが難しかろう。何にしろ、人  
になる気はない」

少女の意見に心の中で賛成する。

着替え終わり後ろを向いた。部屋の入口近くで少女は寄りかかっ  
ていた。少し顔を下に向けている。やはり恥ずかしかったのだろう  
か。

終わったことに気付いたのか少女は顔を上げた。



「腹が減った」

「わかったけど、お前下で食うのか？」

「無論だ。他にどこで食えと申す」

考える間もなく少女は扉を開けていた。  
その後を追いかけるように続く。

「お前さ、」

「なんだ？」

「いや、なんでもない」

後ろを追って気付いたのは、歩くたびに尻尾がユラユラと左右に揺れる事だ。ワンピースを着ているからか、ペンギンみたいな歩き方に揺れる尻尾が、本物のペンギンに見えた。竜ってこんな歩き方をするのか。それともこいつだけがそうなのか。その小さな後姿に悩まされる。

疑問が解けないまま下に降りて、居間に入る。誰も少女には無関心。見えてないから当然だった。

そして、俺は想像を絶する少女の食欲を見せられることになる。

出会い？

自室のドアを開けた。俺じゃなく、<sup>ひめ</sup>罪羅がだ。

他の人間には見えないから、幽霊かと思っていたら違った。勝手に出入りできない辺り、実態はあるらしい。物も掴めるし触れられる。いわば透明人間みたいなものらしい。

ドアを閉める。迷わず罪羅は俺のベッドの上に座った。太い尻尾があるのに器用に座るもんだと感心する。

「すごいよな」

「ふむ、足りぬな」

罪羅のは腹の話だ。

「知るかよ。あれだけ食ったんだ。もううちにはお前に食わせるような飯はない」

「ほう、少食なのだな。竜彦の家は」

「お前の胃がでけえんだよ」

さっきの悪夢のような記憶が蘇る。

そもそも俺が食べていいと言ったのが悪かった。しかし、そこまです食うとは思っていなかったのだ。罪羅は足りぬと言っているが食べた。大皿での餃子3人前、約100個を。ありえないことだ。いくらなんでも9歳の少女が食べる量じゃない。ましてや、それで足りないのだから、10人前がないと足りないのだと思う。本人が怪物なら胃も怪物だ。そのせいで、俺は家族からかなりの誤解を受けた。昨日の今日で俺は大食い王になって叱られた。ベッドで寝転がる少女のせいで。

幽霊改め妖怪改め、自称と見た目が竜の怪物に俺は飽き飽きする。

こいつが毎日うちで食べていたら食糧がなくなる。大食いの怪物を飼って、家計が破産なんてことになったら俺のせいだ。悪いが出て行ってもらう。

「お前、帰れよ」

寝転がる少女が起きた。身軽だ。

「何を言ってる。今日から我もここに住むことになったのだ。竜彦がいるのであれば当然であろう？ それともお前が我についてくるか？」

なぜ上から目線なのか分からない。あれだけ食ってなんでこの態度でいられるのか。

「馬鹿言うなよ。どこで寝るんだ」

「ここだ」

罪罟は手ではなく尻尾でベッドをバシバシ叩く。アレはきつと少女にとっては指差し棒だ。じゃなきゃ、俺が殴られて平気でいられるはずがない。

指し示す場所に俺は言う。

「そこは俺が寝る場所だ」

「では竜彦も寝ればよろう」

提案がおかしい。なんで怪物と寝なければいけないのか。仮にも少女は竜だ。雑食で大食いの竜。暗に、俺を見て腹の足しにはならないが食えると言ったのだ。その真横で安心して寝れるわけがない。適当に言い訳する。

「狭いだろ」

ベッドを見ながら少女が唸る。声が年齢に似つかわしくないのが変だ。声変わりか。

「そうか。お前はどれだけ幅を使って寝るのだ？」

それもそうだと頷いた。俺のベッドは少し大きいから二人で寝ても足りる。

俺も罪羅も太ってるわけでも痩せてるわけでもない。罪羅はどちらかというと細身だ。それで足りないベッドじゃない。ベッドに近寄るが、言い訳が思いつかず口調が荒くなる。

「とにかくそこで寝るなよ」

罪羅が体を揺らした。子供がぐずるように。

「嫌じゃ。我が決めたのだから、ここで寝る」

「お前が決めるな。俺の部屋だぞ」

「嫌というたら嫌じゃ」

罪羅は、バン、と今度は手でベッドを叩いた。ぶうたれた顔をして足をパタパタとばたつかせている。ここで寝ると大声を出して言った。

なんだこいつ。そう思った直後、罪羅はごろりとベッドに横になった。

「おい、起きろ。そこで寝るなって」

「我が寝ると言ったら寝るのだ。竜彦のベッドであるぞ」

支離滅裂だ。俺のベッドと分かってなぜそこで寝る。

「そうだ。俺のベッドだ」

起こそうとした罪羅が半開きの目を覗かせる。かわいいのだろうが、今は関係ない。

「竜彦、ぬいぐるみはないか？」

「ぬいぐるみ？」

「なんでもよい。よこせ」

罪羅から手を放す。ベッドで寝返りを打って遊んでいる。

子供か、とツツコミかけたが罪羅は子供だ。若干9歳というのが俺の見積もりだ。精神年齢がいくつかは知らないが、たぶん低い。

「ぬいぐるみ渡したら退くか？」

「嫌じゃ。ここで寝ると言うたであろう。おぬしは女子おなこを地で寝せるのか」

女子おなこの前に竜って寝床は地面だろ。少女の言葉のあまりの衝撃でツツコミ忘れた。俺が知ってる竜は地面とか沼とかで寝てる。こんな部屋の中で、ましてやベッドで寝てる竜を俺は聞いたことがない。それとも、寝床が地面というのは人間の想像であって、本当は寝てるのか、人間みたいに。だとしたら、俺は竜に少なからず幻滅する。言いたくはないが、竜ってカッコイイとか言われるものじゃないのか。

ベッドで駄々をこねている少女を見ると、竜へのイメージが消失していく。

「はようぬいぐるみを持ってまいね。我が寝てしまっ」

これだ。いつそのこと寝ればいいのになぜか待ってるのが分からない。

「竜彦、まだか。我が寝るぞ。よいのか」

「いいよ別に。てか寝ろ」

そう言いつつ、仕方なく押入れを探す。ギャーギャー騒ぐ罪羅を後ろに、押入れを漁っているうちにいい物を見つけた。

くすんだ緑色の恐竜のぬいぐるみ。両手で体を掴んでも少し余るぐらいの大きさ。目が大きくて口を開けている。恐竜だから、翼はないがこれでいい。

それを罪羅に持っていく。目が虚ろだ。ベッドで暴れるのを止めて、ぼうつと天井を見ている。

罪羅の前にぬいぐるみをかざす。

「ほら、これでいいか」

「うむ……よい」

罪羅がそれを抱き込んだ。恐竜がかわいそうなぐらいに潰される。生け贄にしたって、もう少し手厚く歓迎してやってもいいはずだ。

寝息を立てる少女の姿に仕方がないと息を吐いた。

今日は俺のベッドで寝せる。その代り俺は下で寝る。気に食わないとはいえ、起こすのもどこかわいそうだ。

寝姿は完全に小さな子供。とてもじゃないが、異形の生物には見えない。尻尾と翼がない限り。

恐竜を抱きしめて寝る罪羅の上にそつと布団を掛けて、俺は部屋

をあとにした。まだ、7時を過ぎたぐらいだったからだ。

それからテレビを見たり、風呂に入ったり、勉強したりと寝る時間までを過ごした。

これが夢かもしれないとか、少女をどうやったら成仏させられるかとか、迷子なのかもしれないとか。そんなことを思いながら、俺は布団を敷いた床の上に寝た。寝心地はそこそこだ。

竜王。それは遊びやゲームではなく、竜達の戦いだった。竜の王様を決めるための、竜達による戦いらしい。どんなものかは知らないけれど。そして、ベッドで寝ている少女も自分が竜だと言っている。尻尾と翼が生えている辺り間違いない。これが夢じゃなければだ。

少女の言うところ竜王になるために竜達は人間と組む。そうすると、勝率が上がるらしい。戦略とかでどうにかなるんだろう。その前に2人で挑むんだからそれも納得できる。

少女もそのために組んだのだと俺は思っていたが違った。

罪<sup>ひめ</sup>羅は竜王になる気はないらしい。戦う気もないらしく、終わるまでの間を静かに過ごしたいらしい。そのための護衛兼隠れ蓑として俺を選んだ。竜王に興味がないというだけで。

選ばれた俺としては複雑で困っている。少女の言っていることが仮に本当なら、俺は戦うつもりはない。それは罪羅の言っていることと合っているが、守れと言われて守る気もさらさらない。だから一番困るのは仮に他の竜と出くわした時だ。

逃げるつもりではいるが、少女を抱えて逃げられるかどうかだ。速かったら追いつかれるだろうし、炎なんて吐かれたら即死だ。俺は走るのもそこまで速くないし、耐熱性の鱗なんてない。

面倒なことに巻き込まれた。

竜王。それだけを考えているうちに、いつの間にか俺は眠っていた。

声がした。やたらとうるさい。

「たつひこー」

頭の上で声がする。そして、なぜか揺さぶられている。グラグラグラグラ。何度も何度も揺さぶられる。誰か分らないが、俺の睡眠を妨げているのは確かだ。

「たつひこー」

微かに瞼を開けた。ぼやけた視界に、ぷにっとした頬と困った顔が浮かぶ。何か困っているのか怖いのか、青っぽい瞳が今にも泣きそうに潤んでいた。

少女が俺を揺さぶる。

「たつひこー」

寝ぼけた頭を起こした。ダラリと起き上がり瞼が閉じる。布団に座った感覚だけで、座ったかどうか分からない。いや、座った。それはしっかりしている。だが、ぼーっとしていてよく分からないが、



罪羅が頻りに俺を揺すっている。

「たつひこーねえねえ」

うんうんと頷きながら手でケータイを探す。何時か分からない。朝が夜中かも分からない。夜中だったら寝る。朝だったら起きる。それをはつきりさせるために、とりあえずケータイを探して、柔らかい感触に触れた。触ってみて分かるのは手だ。

温かな少女の手。だが、少女の手はいらない。俺が欲しいのはケータイだ。

「たつひこーねえねえ」

やけに甘えた声だ。昨日の態度とは大違いだなと思いつつ、手でケータイを探す。どこに放ったのか分からない。寝相が悪いと困るのはこれだ。ケータイが朝には紛失している。

困って罪羅に聞く。瞼は閉じたままだ。顔がどっちか分からないがそれはいい。開けたら俺の頭が起きてしまう。

「罪羅、ケータイ」

「ケータイじゃなくて」

「何時？」

「トイレの時間」

「わかんねえよ」

俺は再びケータイを手探りで探す。と、手が止まった。罪羅が何か言った。不吉な予感がする。

「なんつった？」

「トイレに行きたいの」

「なんだ、行つてこいよ」

面倒な奴だ。トイレなんか自分で行けばいい。場所ぐらい分かるんだから。

「場所分らない」

「はあ、なんで」

「行つてないもん」

馬鹿だ。住んでてわかんないのか。昨日来たわけじゃあるまいし。いや、罪羆は昨日来たのか。なら場所も分からなくて当然だ。分かれという俺の方が馬鹿だ。

そんなことを思いながらぼーっと座る。

ケータイなんかどうでもいい。このままでも眠れる。寝れば同じだ。なのに、罪羆が揺さぶる。

「たつひこトイレ」

俺はトイレじゃない。行きたくもない。

「もれちゃう」

罪羆はしつこいのか。俺はトイレに行く気はない。

時間が何時か、と思ったところで目を開けた。罪羆の言葉を振り返って一気に目が覚める。

「なんつったお前!？」

「もれちゃう……」

泣きそうになって股を押さえる罪羆がいる。

意味がわかり慌てて起き上がった。

「待て。ぜってー待て」

霏霏を脇に抱えて部屋の外に出る。一階のトイレに向かって朝から全速力。階段を駆け下り、居間の横にあるトイレのドアを開けた。恐らくここ数年で一番早くトイレに駆け込んだに違いない。

「お前トイレできるよな!？」

「うん」

答えた霏霏をトイレに放り込んでドアを閉めた。そして急に力が抜けて床にへたりこんだ。危うく漏らすところだった。俺ではなく霏霏が。

額の汗を拭う。朝からこんな緊迫した一汗をかくのも久しぶりだ。瑠美の小さい時以来だから、10年近くになる。あの時も俺は走った。

10年ぶりに一息ついた俺の背中をドアが押した。食いしばる子供の声が聞こえて退いた。中から霏霏が出てきた。にこにこしている。満足したらしい。

「流したよな」

「うん。おはよう、たつひこ」

「あ、ああ。おはよう」

おはようと言いつつ、とてつもない違和感を覚える。少女はこんなに穏やかだっただろうか。挨拶の一つは交わすが、冷たいイメージだったはずなのに、と思って考えがついた。眠くて機嫌が悪かっただけかもしれない。普段はこんなに、

「で、なんでまだお前いるんだ」

罪羆が首を傾げる。

「どうしてー」

俺は思わず後ろを覗き込んだ。

尻尾が見える。翼も微かに見える。間違いない。  
夢じゃない。

「やっぱ現実か。じゃあなんだ、お前は本気で俺を守れてことか」  
「たつひこが罪羆を守ってくれるの？」

なぜ聞かれるかが分からない。

昨日のことを思い返すと、確かに罪羆は言った。

自分は竜王になりたくない。そのために我を守れと。

「お前が言ったんだろ。俺に盾として守れって」

「やったー。たつひこが罪羆のお守りー」

飛び上がった。なぜこいつが喜んでいるのか分からない。たしか昨日は当然だとか言っていた。俺が守ることがごく当たり前かのように、踏ん反り返えていたはずだ。

謎が謎で謎を呼んでいる。理解不能だ。

とりあえず、廊下でバタバタしている罪羆を誘導して上に連れて行く。そして自分の部屋の時計を見て驚いた。

五時。それこそ夢かと思った。おふくろが起きている時間で皆寝てる時間だ。俺もこんな時間に起きたのは数少ない。罪羅に無理やり叩き起こされたわけだ。起きもしないこんな時間に。

「罪羅、お前」

「どうしたのー たつひこ」

ベッドに上り窓の外を見ていた罪羅に、可愛い笑顔で振りむかれる。

「お前、なんでこんな時間に起きたんだよ……」

罪羅の笑顔に思わず口調が弱くなる。これで、なんだ、って口調だったら怒ってる。だが、怒れない。起きた俺も悪いのだ。起きなければよかったと後悔する俺に罪羅が叱られた風に答えた。

「トイレに行く時間だったから起きたの……」

沈黙を消すかのように外から鳥の音がする。朝だ。紛れもない静かな早朝。

漏らされても困っていたのは確かだ。トイレに行きたかったら起こした。それは仕方ないことだと考えて罪羅に聞く。

「寝るのか？」

「うっん。寝ないよ。たつひこも寝ないよね」

それに頷いた。寝るつもりはないが、喜んでるこいつが理解できない。

この時間に俺に何をしろと言っんだ。

「なあ霏霾。お前、これから何するんだ」

俺は聞いたことを後悔する。

「鬼ごっこしよー」

「するわけねえだろ！」

「やだー、たつひこと鬼ごっこするの」

「やるかよ、こんな朝っぱらから」

「じゃあかくれんぼ」

「しない」

「じゃあおままごと」

「やらない！」

「じゃあたつひこは何がしたいの？」

寝たい。けど眠れない。かといっておにごっこはできない。霏霾は俺以外に見えてない。それなのに俺が遊んでたら、俺は危ない奴だ。

ただ、今にも遊びたいとぐずりそうな少女を一人にするのもできない。ここで泣き喚かれた堪らない。

そこで俺は考えた。遊びたい盛りの少女がここにいる。俺はこのあと学校だ。遊びたい盛りの少女が俺の学校に着いてこないわけがない。家に置いておけばどうなるかなんてわからない。そしたら、自然と連れて行かなきゃなくなる。

そうなった場合、俺は学校の中でこの少女を相手にしなきゃいけないわけだ。考えなくても分かるが、学校でこの少女を相手にできるわけがない。見れば話は多少変わるが、どっちにしても無理だ。今遊びたいのは山々だろうがあとだった。

どうするか考えて霏霾が話しに乗ることを祈る。

「遊ぶのはあとだ」

「やだー」

「その代り俺が今から言うことをよく聞けよ。じゃなきゃこの遊びはできない」

「わかった。やるー」

やっぱり話に乗った。上手くいけば学校が終わるまで持つかもしれないと思った。

「今から俺が喋っていいって言うまで喋っちゃだめだ」

「えー」

「ただし、この遊びは手を使うんだ」

「手？」

「そう。手で簡単な会話をする」

「手でお話できるの!？」

興味津々。子供過ぎる罪羈に今は感謝する。後は説明するだけで面倒じゃなくていい。

「ああ。そうだな、」

そう言つて罪羈に説明する。ただ、どこか悪巧みしてるような自分に嫌気がさしたのは、たぶん気のせいだ。

「おい、たつおどし」

「それはししおどしだ。獣が違う、バカ」

屋上の扉を開けた途端、向かってくる角田に言つて俺はおにぎり

を口に入れた。海苔が口の中にひつつく。おにぎりの中身は牛カルビだ。俺が選んで買った物じゃない。

春の暖かな、いや少し蒸し暑い屋上で食べる、ピクニックという名の昼飯だ。ここにきたのも俺が自分で来たいと思ったからじゃない。

屋上の手すりのついた柵に寄りかかる俺の元へ、角田が走ってきた。俺と間を開けて滑り込むように座りやがる。サッカーをやっていたからスライディングが上手い。ふざけて人の足をひっかけるのもピカイチじゃないや褒めてやるのに。

「竜彦なんで今日はここなんだよ」

思った通りの問いに口の中のものを飲み込んで答える。

「ちょっとな。たまには外で食うのもいいなと思ってよ」

「んーまあいいけどよ。ハナユミ達はこれたら来るってよ」

ハナユミ。俺の幼馴染だ。本名は花川由美乃。はながわゆみの角田がハナユミと呼ぶだけで俺はそんな呼び方しない。俺は花川とか由美乃で呼んでいる。あつちは色々な呼び方で俺を呼ぶが。

角田が持つてきた弁当箱を開けながら空に向かって叫んだ。

「花がねえよなあ」

花ならいる、と答えたかった。俺の膝の上でヒヨコのように騒いでいる。ギャーギャー、ギャーギャー。

「たつひこーごはん!」



霏霏の前に手をかざす。待て、だ。そして、矢印を手の形で作り角田を指差す。そっち、という意味だ。

合わせて、人がいるから待てと示す。口をアヒルのようにして霏霏が膝で大人しくしている。

朝の時間に霏霏に覚えさせたのだ。簡単な手旗信号みたいなものを。それを駆使して今日一日、昼までをどうにか無事に乗り越えたのだ。

授業中に走り回る霏霏を隠れて捕まえたり、体育の時間に皆に交じって走る霏霏を捕まえたり、俺のノートに勝手に落書きしたのを気付かず先生に出して怒られた。そんなことを平気でする少女と半日乗り越えたのだ。

だからこそ、今大人しくしているあたりが怖いが、俺は角田と話す。息抜きの時間だ。

角田とくだらないことを話していると、急に霏霏が膝の上でユラユラ揺れだした。

「いてっ」

右手の中のおにぎりが一瞬にして消える。おにぎりと一緒に俺の手ごと霏霏は噛みやがった。

「竜彦どうした？」

突然騒いだ俺に角田が怪しい眼を向けた。霏霏が俺の手を噛み続ける。飯は食ったのに何の用だか分からない。拳に力を入れて霏霏の牙を追い返す。

「いや、なんでもない」

「お前手から血が出てるぞ」

「大丈夫だ。さっき蟻に噛まれてよ」

そう言いながら、血のにじむまで俺の手を噛んでいる罪羆の口の中に手をつ込む。はたから見たら、俺が手の近くで何かしてる怪しい奴だ。だが、そんなのは今は関係ない。さすがに痛い。それに、人がいるこんな所で、何してんだこの牙の鋭い怪物は。

怪しい行動に角田が聞いてきた。

「何やってんだお前」

「うるせえな。ちよつとした運動だよ」

角田と罪羆、両方に言った。

罪羆の牙が食い込んだ。体中から汗が噴き出す。噛まれている右の腕には血管が浮かぶ。耐えきれない。

「おい、竜彦。大丈夫か」

答えず食いしばる俺。角田の相手をしている場合じゃない。雑食の鋭い牙をもった人の形をした凶悪な獣に手を噛まれているのだ。相手なんてしてられない。

「グー」

罪羆が唸る。俺の手を噛みながら。

痛みに我慢できなくなり、腕を振った。手から罪羆が離れ宙を舞う。

「だあつ。何してくれてんだてめえは！」

「どうしたんだ、竜彦。てか血がよ」

罪羅が少し離れた場所に無事着地。俺の横では角田が慌てていた。息遣いが荒くなる。太めの針で刺したような穴から血が流れている。俺は手を押さえた。

「角田。悪いが、一人にしてくれるか」

「え、あ、ああ。なんか今日お前やバそうだしな。でも、大丈夫か」  
「ああ」

角田が屋上から出ていく。それを見届けて俺が見るのは罪羅だ。投げ飛ばされた先でちょこんと座っている。ちょこんと。

「何してんだお前は！」

噛まれた怒りを罪羅に対して飛ばす。冗談じゃない。昼飯のたびにこれでは俺の手が持たない。  
罪羅はビクリと立ち上がり、バツが悪そうに俺の方をチラリと見た。

「だって、ギョウカルビが着いてたから」

「だってじゃねえだろ、だってじゃ」

「お腹すいたんだもん」

「腹減ったなら自分の手で取ればいいだろうが、なんで噛みつくんだ。お前は犬か！」

「犬じゃないもん竜だもん！」

「竜でもなんでもいい。血が出るほどに噛むな、人の手を！」

「血が出なければ噛んでいいの？」

「噛むなっって言っただよ」

「……………は、い」

俯いて罪羅が近寄ってくる。押さえてる間に手の血はどうにか止

まった。だが、痛みは続いている。

近づく罪羅に冷たい眼を送りながら激痛の走る腕を押さえ続ける。とんでもない猛犬だ。飯と間違えて食べたのならまだしも、俺の手に飯が着いてたから食ったのだ。犬の方がまだ幾ばくも利口なのかとも思える。

それに手の傷から見ても犬よりも鋭い歯を持っているらしい。犬歯が発達してるんだろう。それでいて噛むとは、要注意もいいところだ。

罪羅が俺の前に来てぺこりと体を折った。

「ごめんなさい」

「もう噛まないって誓うんだったら、許してやる」

「誓う……」

頭を上げて俯く罪羅。言葉に詰まる。本当に許していいのかどうか迷う。下手をすればもう一度噛みかねない。

悩んで俺はしゃがんだ。目に溜まっている涙が本物だと信じたい。

「指切りしろ」

罪羅が俺の目を見た。恐る恐る見ているのが分かる。自分のしたことが分かっている証拠だ。

「指切るの？」

「違う。約束だ」

右の小指を出す。噛みついたら悪いが殴る。

罪羅も小指を出した。物凄く小さい。小指を繋ぐ手が震える。

「もう絶対に噛むな。それと、その尻尾で俺を叩くな」  
「わかった……」

指切りげんまん、と約束はした。これで恐らく噛まないはずだった。もしこれで噛んだら……もう一度やるしかない。

指を放したあと罪羅の頭に手を乗せて気付いた。頭がトゲトゲしている。いや、むしろ何か出っ張っている。

尻尾。翼。俺は嫌な予感を頭に浮かべた。

「お前、角生えてるのか」  
「うん……」

衝撃、だと思ったけどそれほどでもなかった。手を噛まれた方がよっぽど心に響く。悪い意味で。

罪羅がゆっくりと俺を見上げた。半べそを掻いた痕が目元に残っている。

「たつひこ」  
「なんだよ」

俺は罪羅の恐ろしさを知った。空気の読めない、この恐ろしさを。

「お腹すいた」

信じられないほどにタイミングがいい春風が吹いた。

二人とも空気を読んでくれ、そう思い溜息を吐いた。手の傷に風が染みた。砂埃が入ったのかもしれない。

罪羅に笑いかける。

「飯の続き、するか」

「うん」

罪羆は食った。俺の手じゃなく、俺の飯全てを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3190ba/>

---

竜王の系譜（仮）

2012年1月8日21時53分発行